

“嬰ハ短調と嬰ヘ短調の世界”

— 嬰ハ短調と嬰ヘ短調の名曲を探る —

プログラム

“調性”を特集するシリーズは短調、長調が終わりましたので、今回からは、“嬰”、“変”の付いた調性がスタート、今日は嬰ハ短調、嬰ヘ短調で書かれた名曲をお送りします。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第14番は“月光”の名で親しまれている名曲で、詩人のレルシュタープがこの曲の第1楽章を聴いて“スイスのルツェルン湖上に照り輝く月光を連想させる”と評したことに由来しています。弟子の伯爵令嬢ジュリエッタ・グイチャルディに献呈されました。即興曲第4番はショパンの死後発見、出版されましたが、やるせない程の悲しい美しさと中間部に甘美な調べを持ち“幻想即興曲”という名で知られる名作です。ワルツ第7番はマズルカに近いリズムで華やかさもありますが、そこににじみ出る哀愁に魅了されます。リストのハンガリー狂詩曲第2番は全19曲あるピアノのための作品集の1曲で、後に弟子のドップラーと共に管弦楽用に編曲され、一層親しまれるようになりました。故郷ハンガリーの民族舞曲チャルダシュ風のスタイルを持った名曲です。管弦楽版は二短調に直されていますが、原曲のピアノ版との聴き比べでお楽しみください。マーラーの交響曲第5番は1902年42歳の時に完成された作品で、1971年のヴィスコンティ監督の名画「ベニスに死す」で耽美的な美しさに溢れたアダージェットの第4楽章が使われ、一躍有名になりました。葬送行進曲で始まる第1楽章、複雑な構成の中にもヴィルトゥオーゾ的なオーケストラの躍動感に溢れたロンドで終わる最終楽章など、多くの聴き所を持ったマーラーの中期を代表する傑作です。嬰ヘ短調で書かれたチャイコフスキーの“ロメオとジュリエット”はシェイクスピアの同名劇に基づく作品で、劇的効果とロマンティックな旋律で知られる名曲です。 (中川)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) :

ピアノ・ソナタ第14番嬰ハ短調 op.27-2 “月光”

ブルーノ・レオナルド・ゲルバー (ピアノ)
(1990.3.13 オーチャードホールでのLive)

フレデリック・ショパン (1810~1849) :

即興曲第4番嬰ハ短調 op.66 “幻想即興曲”

タチアナ・ニコライエワ (ピアノ)
(1993.7.1 昭和女子大学人見記念講堂でのLive)

ワルツ第7番嬰ハ短調 op.64-2

エフゲニ・キーシン (ピアノ)
(2010.2.27 ワルシャワ・フィルハーモニーホールでのLive)

ピョートル・チャイコフスキー (1840~1893) :

幻想序曲 “ロメオとジュリエット” 嬰ヘ短調

ユーリ・テミルカーノフ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1985.9.17 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

フランツ・リスト (1811~1886) :

ハンガリー狂詩曲第2番嬰ハ短調

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1978.12.31 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ジオルジ・シフラ (ピアノ)
(1980.7.3 オシアツハ修道院教会でのLive)

クスタフ・マーラー (1860~1911) :

交響曲第5番嬰ハ短調～ 第1楽章から、第4楽章、第5楽章

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1978.5.15 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)